

## 書 評

## 『被抑圧者の教育学』パウロ・フレイレ著

小沢有作・楠原 彰・柿沼秀雄・伊藤 周 訳 亜紀書房

定価1500円 324頁

須田 桂 吾 (日本労協連センター事業団・運動推進本部)



著者のパウロ・フレイレは、ブラジルで生まれ育ち、後にチリに亡命、アメリカ、ギニア・ビサウなどで、識字教育の実践などを通して、社会において抑圧され虐げられた人々、および抑圧者自身をも含めた人間相互の解放に尽力している人物である。

著者の経験が主としていわゆる発展途上国で展開され、そうした経験をベースに本書が書かれているために、「豊かな」先進国に住むわれわれ日本人には少々縁遠い内容と思われるかもしれない。しかし、例えば著者の提出する「銀行型教育」（それは、あたかも銀行で預金するかのように、教師が生徒に知識を一方向的に注ぎ込むような教育。そこでは、教師と生徒は、互いに切り離され、疎外された無意味な知識の量などに価値が置かれる。）と「課題提起教育」（学習する主体の生きたテーマに基づいた内発的教育。教師と生徒とは、共同探究者として位置づけられる。ダイナミックな探究は、世界への積極的関わりと同時性を持つ。）という概念などは、受験戦争という形で知識偏重の詰め込み教育をこれまで一貫して行ってきた日本の学校教育の状況の中でも十分説得力を持ちうるように思われる。

本書では、広く社会のなかで、抑圧者と被抑圧者とはどのような関係にあるのか、抑圧の具体的状況を社会心理学的に分析している。そのうえで、社会を人間的に変革しうるのは、社会の現実を目

覚めた被抑圧者であるとし、そのための理論として、他者や現実世界との対話や交流を通しての学習によって、他者および世界をあるがままの姿で再構成・意味化するという意識化（conscientization）を中心的概念として提出している。意識化によって、人々は社会の人間化への変革に積極的に関与しうるのである。

われわれの労働者協同組合運動やその他さまざまな市民運動においても、戦後日本の高度成長のなかで主として形作られてきた経済中心の一元的な社会システムからバブル後の生活者中心の社会システムへと移行させるためには、本書の提出するさまざまなアイデアはあらためて大いに注目されるだけの価値を持ち合わせているように思う。他者や現実世界との関わり、労働を通しての社会的関与によってわれわれがどのように人間的に成長していけるか。人間発達に役立つ民主的な組織体を労協がどのように作り上げていくのか。また、世界や日本の現状等を考えたときに、どのような事業が、真に社会的有用労働と言えるか、等々を考え実践する上での重要な道筋を示してくれるのではないだろうか。

著者の豊かな実践と省察をもとに生き生きとした内容を持つ本書は、理論とともに正しい認識のもとづく勇気を奮い立たせてくれる、貴重な読書体験を与えてくれるものである。社会の人間化のための、さまざまな運動に関心を寄せる人々に広く読まれることを期待したい。